

浄土

1979-2

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別取扱郵便誌）第三二五号
昭和五十四年一月二十五日印刷 昭和五十四年二月一日発行
第四十五卷 第二号



S. Kuz

心静かなひと時を

—梅の花が教えるもの—

昨早春、小さいながらも枝の先にまで蕾をつけた鉢植の梅の木を購入した。一週間ほどで一輪、また一輪と咲きはじめ、十数本の小枝いっぱい花をつけ、芳香とともに目をたのませてくれた。



やがて花は終り、かわって新芽を吹き、新緑に覆われた。地面に返すときがきたのだ。鉢ごと庭のかた隅に埋め込むことにした。

ときは移りゆき、庭先の緑は陽光を浴び、慈雨を受け、大きく成長していった。梅の木も、その小さなからだ精一杯に成長したに違いない。しかし、その背丈以上に伸びる雑草にはまいったようだ。雑草を取り除くたびに、梅の木の葉の色つやが落ちるように感じられた。

だが、そこはもとと野性木の梅である。晩秋を過ぎ、寒さが日一日と増し、自然界も長いつらい冬ごもりの準備を始めた頃より、その実力を発揮しはじめたのだ。すでに枝の先々にまで、小さなかたい蕾をつけていた。掘り起すときがきた。ここでさらに驚いてしまった。小さな鉢植ゆえ、たかが知れているとばかりに、その幹をつかみ引きぬいた。ところがぬけないのである。シャベルを用意し、掘り起した。手ではぬけないはずだ。そ

の根は鉢からはみ出し、大地いっぱい張りつめられていたからである。

雑草に痛めつけられている間に、その生きぬく術として、見えぬところでがんばっていたのだ。可憐な花に似つかわしくない、雄々しい一面を見た思いがした。

選別した枝に蕾をつけた梅の木は、日だまりに置かれ、淡い陽光を受けている。

そして今、早咲きの八重の美しい姿を見せてくれた。

厳冬期、森羅万象うごきが鈍いなかにおいて、この梅の花は、風雪にもめげず、静かに力強く咲き続けている。陽春、花々しく咲き競う桜の花が、一瞬の風雨に微塵に散りゆく姿とは、あまりにも対照的にだ。

こうしたことから、桜の花の散りざまは、人生無常なり、と譬喩されるが、梅の花はさしづめ、人の堪え忍び生きゆく姿勢を表わしているともいえるようか。

来るべき陽春を悔いなく迎えるためにも、気品高い梅の花に思いをさせ、今こそ、心静かな忍従のひと時をもちたいものだ。



易行道とは、謂わくただ信仏の因縁をもって、浄土に生ぜんと願すれば、仏の願力に乗じて、便ちかの清浄の土に往生することを得。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集1 p.13)

目次

法話

涅槃のころとして静けさを想う……………梶原重道……(2)

鉄槌春風に舞う……………中村康隆……(6)

<民話シリーズ>泣き声、念仏に救われる……………谷川のぶ也……(14)

〈連載〉善導大師の生涯とその教え(3)

善導大師の誕生と求道……………(10)

西行と仏教(一)

—出家棄世の真意—……………河野喜雄……(26)

<読者の声>信仰への道

『無量寿経』に説かれていること(三)……………吉村孝……(31)

法然上人の弟子たち⑥

津戸三郎為守のこと〔二〕……………梶村昇……(19)

浄土句集……………一田牛畝選……(24)

<新刊紹介>『和訳 法然上人 選択集』(村瀬秀雄著)……………(36)

<表紙裏・巻頭言> 心静かなひと時を……………長谷川宣丈

念仏ひじり三国志⑧——法然をめぐる人々……………寺内大吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部

法 話



涅槃のころとして

静けさを想う

梶 かじ
原 わら
重 じゅう
道 どう

(堺市超善寺住職)

涅槃会が近づくと共に、暗い本堂の脇壇に掲げられた大きな掛軸の前で、手をとって焼香をさせられた、「ねはんさん」の幼い日の思い出が、私の心に浮かぶのである。

大きな樹にかこまれて、金色のまんまんちゃんが横になり、多くのお弟子や鳥獣が泣いていること、そのまんまんちゃんがお釈迦さまで、集って泣いているものの中で、ただ猫だけが「いないのよ」と教えられたそのときの先入観が、いまこの年になっても相も変わらず、涅槃像とともに想いだすのである。

跡を巡拝し、クシナガラでサルナートの涅槃堂に直参して、長さ六メートルという金色の涅槃像に香を献じて額づいてからというものは、掛軸にのみ拝みつづけた涅槃像への私の感懐は、この巨大な五世紀作といわれる石仏によって、大きな発見であり転換であった。

その新しい感激はいまなお忘れないものではあるが、しかし幼い日の涅槃像へのなつかしい思い出は、依然として残りつづけているというのは、どうしてだろうか。

仏教系の保育園児や、幼稚園児が、こうした意味において、涅槃像の前に手をあわせうる機会に恵まれている

もうかれこれ十数年にもなるであろうか、インドに仏

ことを、私はありがたいことだと痛感している。

「おねはん」とか「ねはんさん」とかの機会から、縁遠くなっている近代社会を、このまま野放しでいったのでは、国際児童年を迎えてどんな対策が協議されても、はたしてほんとうの児童の倅わせがあるであろうか。

そんな不安とともに、世の大人や親たちは、涅槃像の前にぬかずくことができないまでも、年に一度はやはり涅槃なるものの真義を、考えてみるべきではないだろうか。

私の近刊『捨てた鉢に花が咲く』の一節に、「奪われる静寂」という一文を次のように書いてある。

映像時代になってから、考えること、読むことが二番手になってきた。

秒針とともに刻々変化し放映される画面教育では、その変動を目で追うことに精いっぱい、考えてみることも、記憶することもその余裕はない。

映像から離れても、周囲の騒音からは逃れることはで

きないし、外部と遮断された個室にでもこもらないかぎり、じつくりものも読めなく、したがって考えることもできない環境になってしまった。

テレビも終り、深夜放送がなくなっても、走る車の音や、ブレーキや扉の開閉の音は、夜を徹していつとはなく、就寝中の耳を驚かせる。

草木もねむる、といわれた真夜中の静寂さえ、すっかり奪われてしまったのである。

われとわが足音で、肝を冷やしたというような、夜道歩きの経験をもつものは、いまの都市で暮すものにはもういないであらう。

それだけ、しーんとした夜のしじまというものから、縁がなくなってしまったのである。ニイチエの哲学は、こうした夜半の静寂の中の思索と、決して無縁ではなかったようである。

菩提樹下で開悟された釈尊にしても、暁の明星の輝きとともに、心眼がひらかれたのであって、雑踏騒然の中ではなかった。

現代人は、こうして冥想の時を失い、沈思黙考の機会を奪われたのである。したがってゆたかな情操がなくな

り、情緒や思想までも育たなくなろうとしている。

いわゆる、ひからびた人間が、やむなく形成されつつあるということになる。

管理体制下の機械化から、自分を取りもどさねばならない、そのためにも考える時を探し、読む時を追う、静けさを求めねばならない。

つまり私のいま考えたいことは、涅槃という境地への近づきとして、ともかく静けさというものの心境をひらかねばならないということである。

一葉落ちて天下の秋を知る、ためにはどうしても、落ちる一葉の静けさを味得しなければならないと思うのである。

喧喧(けんけん) とうとう、がくがくといった精神の状態では、一葉はおろか万木すべて葉を落し終つても、ついに秋を知ることではできないであろう。

いまは決して、先に書いたように騒音や雑音ばかりの世の中ではなく、人間それ自身が互いに互いの主張を譲らず、言いたい放題、し放題で、まさにけんけんがくがくの時代である。

落ちる一葉の静けさや、そのもののあわれなど、知ることのできる片鱗のゆとりもないのである。

蚊を打って大きな音をさせにけり

鬼城翁のこの一句は、まさに現代人の騒然たる姿態への皮肉ではないだろうか。

一匹の蚊のために、必要以上に大きな音をたてつつけている現代の社会相に、私は人間としての静けさをとり戻さねば、としみじみ感じるのである。

情報化時代の煽動と影響によって、ことごとくに「大きな音を」させつつづけている現代人こそ、静けさを忘れ去ったからではないだろうか。

静けさの中に、つつしみをとり戻し、おもいやりや、あわれみの心を育て直さぬかぎり、どこにほんとうの人間のくらしがあるであろう。

人間としての幸わせやよろこび、そしてその生き甲斐といったものは、落ちる一葉の静けさの味わえるものでなければ、感じとることはできないであろう。

芭蕉は「しづけさや岩にしみいる蟬の声」と、絶世の名句を残している。

なきしきる蟬の声が、岩間の中にしみこむように消え

た後の静けさの中に、人生を考え、生きる力を探ることができるのである。

蟬の声が岩間にしみこむ余韻にこそ、真の静けさを感じる心境がひらけるということは、人間が人間であることから、仏の世界への開眼ではないだろうか。

謙虚にして自らを慎しみ、ものへのあわれみを感じ、おもいやることの心は、かくして岩間をつたう清水のように、清く美しいのではなからうか。

涅槃寂滅ということの意義は、むつかしい仏教の専門術語として遠ざけてはならないのである。

その術語に対する専門解釈もさることながら、人間は生きていることの寂滅を通じて、もののあわれを感じ、そのゆえにこそものへのあわれみを抱かねばならない。そして人間としてのおもいやりが互いに交流されなければ、人の世のなさけの社会はなりたないであらう。

目をつむり、右臂に北頭の頬を托して横たわる涅槃像の、安らかな静けさが、雑踏の中で我意をつっぱって生きつづけている人間の生活に、何を教え、何を感じさせているかが勝負どころである。

大声で泣きさけび、どのようにわめきたてても、微動

もせず、ただ黙しつづけるその安らかな涅槃像に、蟬のなき声をきき、岩間にしみいる静けさを想うのである。

目をひらき、耳をすませば、音もなく舞い落ちる一葉に、天下の秋がわかり、静寂の声がきこえるのではないか。

古池に飛びこんだ蛙の水音に、永遠の響きを感じずにはおれないように、人生の一挙手一投足に、その静けさを通じて永遠の響きを感じずべきではなからうか。

何十万、何百万と社頭に群がったという群像を、テレビの画面からみていて、どこに初詣での真の姿があるのだろうかと疑った。

騒音と雑踏の中で、押すな押すなの混乱の状態で、馬車馬のような現代社会の生活が浮き彫りにされたような感じを、さらに強めたのである。

一歩退いで静かにものを想う機会を失ってしまった現代人にとって、少くとも静けさをとり戻さねばなるまい。

人間が正しく生きるためのこの静けさを、涅槃のこころとしてうけとりたいものである。



鉄槌春風に舞う

なかむらこうりゅう
中村康隆

(大正大学名誉教授)

昨年ふとした縁で、筆者の住む静岡県浜名湖北に「奥山の半僧坊」として知られる、臨済宗方広寺派の本山方広寺の管長であった今は亡き青竜窟主間宮英宗禅師の「鉄槌舞春風」と書かれた一行書を入手することができ、これを頂門の一針とも、ありがたい励ましの語ともして、しみじみと受けとらして頂いたことであった。この語そのものは禅家にあつては、ひろく「無作の妙用」



という禅機を示す言葉として愛用せられるところで、今さらことあたらしくいうこともないかも知れないが、宗教の世界は結局自らの体験の深みの範囲でしか理解し得ない境地であるから、同じ言葉の意味も、人々により、またその時の心境により、幾様にも解し得るものであることは、日常の人間関係でも受けとり方の相違によって誤解や曲解を生み易いこととそう違うものではない。したがって、この言葉にしても、あるひとは「ボヤボヤするな」ととるかも知れないし、あるひとは「思いあがるとえらい目にあうぞ」との警告ともとることだろう。さらには逆境や失敗も大いにひとびとの奮起をうながす愛

の鞭と受けとるべきだと感ずるひとすらあるであらう。本然の境界に立てばすべてこれ仏作仏行だとの、悟得をさすとするひともあるかもしれない。

私などは、そんなおおそれた悟得の境地には立ち得ない。けれども、中学から大学にかけての頃、親しく教えを頂いた山崎弁栄上人や土屋観道上人、大学での恩師椎尾弁匡先生らの勸奨による念仏専修の中から、いつしか、いつもみ仏の愛のみ光りにはぐくまれて生かされる己れでしかない身、いつも仏の導きを希って生きる外ない己れであることを心にとめて生きてきたので、どのような苦境に立つても必ずやみ仏は救いたもうと信じつつ生きてきたので、たとえ災いがあってもそれを良き機縁に転じようと深く心に刻んでいたのであった。

終戦直後のことである。大学の緊縮財政のため暫く休講させられたことがあった。それまで研究室の実質的マネーに腐心したつもりの自分に思わぬ閑日月が恵まれたのを機に、暫く戦災で消失した寺の復興と地域活動に専心することとした。まづ第一に戦後の荒廃の立て直し

には次代の健全な育成が最も肝要との見地で、知友と計って子供会を始め、また市に児童愛護協会を設置して子供会の拡大をねらったのであった。それはやがて国の方針と結びついて各町内会毎の子供会設置となり、また愛護協会も児童福祉審議会へとバトンタッチされたことである。寺域に幼児保育施設を設けたのも同じ意図からであった。一面、仏教会に関係して同僚と手を組んで花祭りをするの商店会とタイアップして全市的な規模に拡大し春の大売出しと広告バレードや芸妓連の手踊りを町中に繰りひろげる一方、可憐な稚児白象行列により劇場、後に公会堂で印度舞踊や沖縄芸能とか児童劇や映画の余興を交えた祭典を行なったし、新しく港祭りが開催されたのに加わって漁業会と結んで「地藏流し」を行なったこともあった。役職をひいてから花祭りも寺方だけに縮小され、地藏流しもいつか止めてしまった。創設はたやすいが持続の難しさをつくづく感じさせられ、すべてはそれに当たる人の情熱と努力だということを思い知らされたことであった。それと共に、自分としては、ともかくもその時その処に臨んで最善を尽すことでよしとせねばならないことも肝に銘じたことであった。かねがね椎尾

先生が「時は今、処足許、そのことに、打ちこむ命、とわのみのち」と詠われたことの尊い教えを自分なりの仕方では、またいつも世尊が行雲流水、飛ぶ鳥の跡をとどめない様を尊ばれたみ教えに、自分なりの心得を味わわせて頂いたことであつた。

こうした思い出話を書きつづるのは何とも気恥かしい限りであるが、これも人生体験の一環としての感想の意味で寛恕して頂きたい。

学生時代には学友会に出版部を作つて、「大正大学々報」という研究誌と、文芸雑誌「華鬘」と「新聞」とを出したこともあり、前者はやがて大学自体の出版事業と転進したことである。また増上寺に芸術部を作つて、施本用小冊子「浄き園」を発刊し、日比谷公園での全仏の花祭りを企画して、今は亡き浅草の詩人一瀬直行の「花祭り讃花」を出版したりした思い出も懐かしいし、伝通会館落成を祝して会館誌「伝通」を発刊したこともあつた。それらはそれぞれにその時の必要性を信じての仕事だつたから、今は消滅しても少しも悔いることはない。

人生というものは、結局、その時その処において誠意とよりくむ以外にはないのである。

戦後大学の人事面の必要性から社会事業の研究室に迎えられたが、めざましい成長期の学問であつただけに仲自分の体系を発表するまでに至らずに職を去つたが、それによつて人間学への広い視野を養うことができ、専門の宗教学理解を深め得たことは望外の喜びであつた。そこでの仕事として有能な同僚のお力によつてカウゼリング研究所を作つたのも、一つには戦後の寺院僧侶のあり方として、人生相談、生活相談など人々の心の相談役としての役割を広めたかつたことと、学生及び学外の人々への新しい開かれた大学としての在り方をも確立したかつたからで、今日でもユニークな研究教育機関として存続を見ていることは喜ばしく、更なる発展を熱望して止まない。こうして大学の一角に職を奉じていたからこそ、五十周年を迎えての学長に押され得たのであつた。当時は学内は混乱し、困難な時期であつたが、前学長の苦勞が実り、また厚生指導の先生方の努力で、さしも熾烈であつた学生運動も終息し、設立宗団や理事・教職員一丸となつて大学将来の基礎作りに専心できたこと

は何といつても幸いなことであった。就任当初は文字通り浅学非才の身の就任を不遜とする方もあった。私はそれをあえて「鉄槌舞春風」の言辭としてありがたく頂いて努力したのであった。漸くにして大学の必要とする校地校舎の新規獲得を果たして、次の仕事としては目指したのは仏教学部の拡充と僧風教育の充実とであった。宗学科の創設と文化学科や芸術科の増設が夢であったが、思わぬ書類の不備のため取りさげざるを得なくなったのは、何といつても責任者の不徳で本来なら辞職すべきところを、理事会の寛恕のもと、幸いに半年の余裕を得て、今度は禍を転じて福とするべく、設備一杯の定員増の申請へと転進を許され、一意万全の用意をととのえることができ、在任中には果たせなかったが、次期学長の手で無事認可が得られたことは、就任当初の念願の大学規模の拡充の一端を実現し得た訳で、この点私への罵りを愛の鞭と受けとめ得たと信じているのである。困窮を避けて安易につくのは易しい。しかし、人生には敢えて難局に立ち向う勇氣も時には必要なのであろう。そう信じて倒れて後止むの氣慨で引き受けた職責であっただけに、任期一杯勤め得た喜びは人一倍なものがあつた。

叙勲の沙汰を拝した時も、辞退してはとの声もあつたが、それはむしろ私を支えて下さった方々を代表してのこととしてあえてお受けしたことであった。旧臘、叙勲と任滿と古稀とを兼ねて頌寿祝賀の会を開いて頂いた時も、それらは本来僧門には無縁のこととして御辞退申し上げたのであったが、日頃御援助頂いた方々への御礼言上の機会としてお受けし、それを機に永年の小論をまとめて以て感謝の印としたことであった。その『宗教学小論集』（国書刊行会刊）の序に私は「人生の道は、まだほど遠いとのみ思っていたのに、いつのまにか荏苒として、もう夕暮れの蔭が色濃くなつてしまつた」と記した。学人としての生涯をふり返る時、碌々となすところもなく過ぎ去つてしまつた悔いは、痛切なものがある。大学の教壇から去るこの春になって、己れの怠慢に、大いなる鉄槌が春風の中に舞っていることを、痛感しているのである。善導大師は「想えば瞬頃の如し」と論されておられる。日に夜に大いに励まざるべけんやである。日暮れて道遠しを嘆いても始まらないのである。

いが栗や笑う顔にもつぶてかな

（白隠禪師）

■善導大師の生涯とその教え■

— 三 —

◇ ◇ 善導大師の誕生と求道 ◇ ◇

○

善導大師の姓は朱氏といい、清の煬帝大業九年（六一三）に誕生されました。それは今から一千三百六十七年まえのことです。その時代は、わが国では推古天皇の即位二十一年にあたり、聖徳太子四十歳のときであります。宗祖法然上人が出世されますより、先だつこと五百二十年もまえのことです。

大師が誕生されたところは、後世に伝えられている多数の伝記の説は、かならずしも一致しておりませんが、『瑞応伝』によりますと、「姓は朱、泗州の人」といわれております。泗州とは、中国は安徽省泗州府盱眙縣の北一里の地であるといわれています。因みに申しあげます

と、善導大師のご生涯やそのお徳を伝える資料は、中国では十八種類、日本で編纂されたものが十種類ほどあり、そのほか碑文や造像銘記など、数多く伝えられております。かように多数の伝記が編纂され伝えられたのは、後世の人びとがいかに大師のお徳を讃仰し、追慕したかということを示すものということもできましょう。ところが、これらの大師の伝記をひもどいてみても、その幼少のころのことや出家に関してはかならずしも明確ではありません。『瑞応伝』によりますと、

「若くして出家す。時に西方浄土の変相を見て、歎じて曰く、質を蓮台に托し、神を浄土に棲まさん」

とされていますが、大師は若いころより求道の心つよく、とくに極楽浄土の有様を絵にした曼荼羅を見ては、浄土のうるわしい莊嚴に、純真な心が引きつけられ、浄土を希い求める信仰の心が開かれていったようであります。とも角、大師は少年のころに出家し、幼いころより熱心な仏教信仰者であったことは間違いありません。

出家剃髪の師匠は、『新修往生伝』によりますと、密州の明勝法師といわれています。密州は山東省青州府諸城県の地であり、明勝法師は、法朗法師の門下で、有名な三論宗の嘉祥大師吉蔵も同門でありました。ついで大師は、二十歳になると、出家僧侶の規定にしたがつて、具足戒（二百五十戒）を受けられ、本格的な仏道修行に精進され、求道生活に続けられたのであります。

大師の有名な『往生礼贊』の「初夜無常偈」には、

「煩惱深くして底なく、生死の海にほとりなし。苦を渡るの船いまだ立せず、いかんぞ楽しんで睡眠せん。勇猛に勤めて精進し、心を摂して常に禪におきたまえ」

と説かれています。この文に、大師の真摯な修行態度をうかがい知ることができます。青年期の大師は、真実の道を求めて旅の生活が続けられたのであります。しかもその旅は、あくまで自己を省察しつつ、自分みずからをいかんともしがたい醜いすがた、底しれぬ業の深さになげきながら重荷を背負ってよろめく歩みでありました。

大師は、はじめは『法華経』や『維摩経』を学び、またあらゆる仏教経典をいくたびもひもどき研究されましたが、のちに経蔵に入って年にまかせて探りあてた経典が、『観無量寿経』でした。釈尊のお説きになられた大蔵経に身を投じられ、この『観経』を得られた因縁を、『新修往生伝』にはつぎのように記されています。

「忽ち自ら思ひて曰く、教門は一道一途より入るべきにあらず、もし機に契わずば、功即ち空しからん、と。ここに於て大蔵経の蔵に投じ、年にまかせてこれを探るに無量寿観経を得たり」

これは、「入蔵探経」の事蹟としてのちによく伝えら

れるものですが、信仰のよりどころを求めて経蔵に入り、祈りをこめて無心に手さぐりで一經を選びだす方法は、大師の独自のものではなく、ほかにも中国ではあったようです。しかし、大師がなされた動機は、広く仏典の示すところに従って、各種の修行を実践したけれども、つねにそれらの修行は大師の心を納得させるものではなくたために、修行とおのれの心が離ればなれになつてゐることのどこかしからでした。「機に契わずは功空し」といわれた言葉には、教えの勝劣を求めるよりは、まず自分のせきららな心をつきとめ、不安と焦燥からの解放であり、なにより安らぎを求めることの深い自己洞察の究明がうかがわれます。

『観無量寿經』を手にして、法悦に心打ちふるえたさまを、『瑞応伝』には、

「妙開律師とともに観經を見て悲喜交歓して曰く、余の行業を修するも迂僻にして成じがたし。ただこの観門のみ定んで生死を越えん」

と記されていますが、大師が『観經』を手にしたとき

感動が伝わってくるようです。妙開律師は同じく道を求めた友であつたかもしれませんが、この二人の若き求道者が手にした經典をむさぼり読みながら、暗夜にともしびを見る思ひのいいしれない歓喜がこみあげてきたことでしょう。



善導大師が求道の旅をつづけて、道緯禪師を訪ねたのは、貞觀年中であるといわれています。道宣律師の『統高僧伝』には、

「近頃山僧善導なる者あり。寶字を周遊して道津を求訪し、行きて西河に至り道緯師に遇う」

と述べられています。大師は名僧高德を訪ねて、諸方をめぐって修行の旅をつづけられたにちがいありません。はるか揚子江の南にあたる風光明媚な廬山までも、大師は歴訪しているといわれます。廬山は慧遠法師が白蓮社という念仏の結社を組織して、盛んに念仏三昧觀を修行し、動乱差別の妄念を滅して、淨土往生を願

たところの、中国ではじめての浄土信仰運動の興ったところであり、この慧遠法師の芳躅を慕って、はるばる大師は足跡を印しているほどであります。そして、遂に大師は西河の道綽禪師を訪ねられたのです。

道綽禪師は、石壁山玄中寺に住しておられました。玄中寺は、山西省太原市の西南にあり、名前のように石壁に囲まれた山中の静寂なお寺であります。いうまでもなく、この玄中寺は、中国浄土教の五祖の第一と仰ぐところの曇鸞大師のゆかりの地であり、道綽禪師が曇鸞大師の碑文を見て感動した結果、熱烈な浄土教信奉者として浄土の実践に心身を捧げられたのであります。この道綽禪師を善導大師が訪ねたのは、禪師が八十歳で、大師が二十九歳のときであり、玄中寺における、一方高齡とはいえ浄土の行業が円熟して悠揚として迫らぬ高僧と、求法一途の念に燃える真摯な青年との出会いは、想像に絶するものがあったと思われれます。

善導大師は、深い感動のなかにいままで解き明かされなかった懊悩の苦悶を禪師にうったえたにちがいありません。『瑞応伝』には、

「遂に道綽禪師のところに至り、問うて曰く、念仏して実に生まるることを得るや否や」

と伝え、大師自ら疑問して残っていた念仏の意義を求められたのであります。すると、

「師答えて曰く、各一の蓮華を弁じ、行道すること七日にして萎まずば、即ち往生を得ん」

と諭されたといわれます。釈尊の説かれた八万四千の法門といわれる限らない教えのなかより、いま大悲如来の本願がとりあげられ浄土への道が淳々と説き示されたとき、善導大師の心中はいかばかりであったでしょうか。それにも増して、言葉をこえて如実に浄土の現相が示されたとき、大師の信根は決定したにちがいありません。

道綽禪師と善導大師の出会いには、神秘につつまれた面も多分にありますが、しかし三昧発得の聖者といわれる善導大師を偲ぶ一面として味うことができます。

（宮林昭彦）

〈民話シリーズ〉

泣き声、念仏に救われる



谷川たにかわのぶ也や

(郷土史家)

榮枯盛衰は人の世の習いである。

とはいえ、榮華を極めたものが、ひとたびその座から落ちる姿は、傍目にもわびしいものがある。落命したものはいうに及ばず、たとい生きのびた者として、その後の生活は哀れこのうえないものとなるのが必定。

この話も、戦乱の世に生れたがゆえに渦中にまきこまれ、数奇な運命をたどった落武者とその妻子の哀れな半生をつづったものである。

ときは寿永四年、平清盛を頂点に権勢をほしいままにした平家一族も、三月二十四日、壇浦の戦をもって源氏一族の軍門に降った。このとき、平家方の人柱として、わずか八歳で西海の果てに崩御された安德天皇をはじめとして、名をなした人、はては無名の人まで、多くが非

業の最期をとげ、散っていった。

◆ ◆ ◆
瀬戸内の海辺ちかくの閑村に生れた菊丸の父重左は、平家の領内を警護する武士であった。

菊丸が二回目の誕生日を迎えてから数日後、平家方は一谷の戦で源氏方に破れ去った。風雲急を告げ、父重左のような後方の地方武士まで戦場に駆り出されることになった。

敗色濃い戦、重左の覚悟は決っていた。

「僕はもう生きて帰れんだらう。みよ、菊丸をたのむ、下級の武士とはいえ、わが家も武家、他人に恥じることない生きざまを教え、育てあげてくれ」

重左は告げ終ると、仲間の武士たちとともに村を出て

いった。見送るみよの目には、永遠の別れになるであろう最愛の夫の姿が残り、やがてあふれる涙の中にまどろんでいるかのようにあった。

しばらく時は流れた。

父の出陣、をもちろん知らない菊丸は元気に育ち、三歳の誕生日を迎えていた。みよにとつては、この菊丸こそ淋しさを慰めてくれる唯一のものであった。なんとか立派に育てあげなくてはいけない。生甲斐でもあった。

重左が出陣してから、早くも一カ年過ぎた厳冬のある日、村にも源氏方が攻め入る、という情報もたらされた。そして、子女たちは一刻も早く村から離れるようにというお触れも出された。

みよは、住み慣れた思い出多い村を離れたい思いと、一方では菊丸を安全な地で育てあげねばという気持が交錯し、心の整理ができず、迷いの中にあった。村を出るといっても行く当てもない。この躊躇が悲惨な光景を見ることになるのは、みよには知るよしもなかった。

村はずれの小高い丘の上に赤い旗が見えてきた。その数はさして多くない。平家方の敗残した武士たちであった。みよはその中に重左の姿を見届けたのである。

「ああ、生きて帰って来られたか、ありがたいことよ、これでもとに逃げのび暮すことができましょう」
みよが叫びながら重左のもとに駆け寄った、その時である。

丘の一隅に見えた白旗は、一瞬のうちに巨大な帯となり、村に攻め入ってきたのである。孤軍奮闘の平家方はつぎつぎに倒れていった。重左とて例外ではない。みよの目前で壮絶な最期をとげたのであった。

菊丸を抱きかかえ、草むらに身を忍ばせていたみよにとって、その光景は別世界の出来事のように思えた。重左が死ぬわけない。悪夢を見ているのだ。必死に打ち消した。

しかし、それは現実であった。

戦は終わった。村を出るしかない。みよはなにかにとり憑かれたように歩き出した。

どれだけ歩いたろうか。夕闇がせまる頃、みよは空腹と疲労、それに背負う菊丸の重さがかさなり、もう一歩も足が出ない状態になっていた。そして、大きな杉の木のもとに座りこみ、いつしか深い眠りに入ってしまったのであった。

亭主と死に別れ、子供のない気安さも手伝って、生来陽気なとら婆さんは、村はずれの一軒家で安気に暮していた。村の家々を回り、年寄り仲間と世間話をしたり、自分に出来ることを手伝ったり、とにかく一日中家に閉じこもることのできないお婆さんであった。

このとら、いつものように朝早くから家を出て、村落に向った。そして、その中間まで来たときです。子供の泣き声が聞えてきました。この辺りで子供の泣き声とは、ちょっと変だ、というわけで、声をたよりに足を早め、その出所をたしかめたのです。

それは、村一番の大木、杉の木の根元、変りはてた母の背で元気に泣く子供の声だったのです。

「おお、また落人か、かわいそうに、さぞかし口惜かったことよ、ワシがおぬしにかわってこの子を立派に育てあげてやるからに、成仏しやれや」

とらは、わずかに温もりをもったみねの背から菊丸を抱きとり、

「坊の名はなんという、一人で歩けるかな」と、泣きやんだ菊丸に、ほほ笑み顔でたずねた。きよと

んとした顔の菊丸は、それでも物怖じせず、「クク丸と申しませう」

と答えたのであった。

こうして、菊丸ととらの奇妙な生活が始まった。子供を育てたことのないとらは、初めは菊丸の挙動に面食いながらも、次第に要領を得ていった。菊丸も初めは、うす汚いとらに馴染まずいたが、面倒みのよいとらの情がうつり、いつしかとらを頼るようになっていった。

とらが村落を、あまり訪れなくなった頃から、村人は菊丸の存在を知った。そして、関わりを恐れた村人はとらに菊丸を捨てるよう勧めた。

「そんなかわいそうなことができるか、わしの生命にかえても、この子を育ててみせるさ」

とらは、頑強に拒んだのであった。

この寒村では、昔より変わった行事があった。それは、若者たちによる井戸掘である。

雨があまり降らず、また地下水にも恵まれなかったこの村では、若者が一定の年令に達すると、大人になる儀式として井戸を掘ることになっていた。その掘り当てた

水によって村人は生活の源としていたので、若者たちも必死であった。まして枯れることない水源を掘り当てた年の若者たちは、年が経てからも大きな顔ができるという有様であつたから、それは大変な行事でもあつた。

さて、とらの手厚い養育のもとで、菊丸は病氣らしい病氣もせず育つていった。

大人たちの心配をよそに、村の子供たちは菊丸とよく遊び、またよく喧嘩もした。もともと武家生れの菊丸である。いつしか子供たちの大将となり、村の子供たちも一目置くようになっていた。それは、菊丸がなにをやっても他人より勝れていたためでもあつた。

しかし、長じてともに立派な若者になりかけた頃からである。その間に隙間風が吹くようになっていた。親たちが、ことあるごとに、

「菊丸さんを見習いな、まったくお前たちは出来損ないだよ、しょうがない奴らだよ」と、罵られたからである。

「冗談じゃない、菊丸の奴め、今に見ておれ」

若者たちは、憤懣やるかたなき思いで、口々につぶやき合つておりました。

そして、遂に決定的な事件が起りました。

村一番の娘として評判の高かつたゆうが、菊丸を恋したといふのです。菊丸とて悪い気持はいたしません。いづれか相思相愛の仲となつていったのです。

「あんな余所者にゆうを取られてたまるか」

村の若者たちはいきりたち、その善後策を講じ、悪巧みを考えたのでした。

やがて、菊丸たちの年令の若者が井戸掘をする年となりました。その年は七人が該当し、菊丸もその中の一人として井戸掘に参加しました。

若者たちは、村はずれの山合いの窪地を井戸掘の場所に決め、交互に掘り始めました。初めのうちは二人づつで掘つていきましたが、深さが人の丈ほどの頃から二人では無理となり、一人が掘ることになりました。そして、二人分ほどの深さまで掘つた時、中にいた若者が、「もうわしじゃ無理だ、菊丸代つてくれ、お前はなんでもできるそうだから、これくらい楽なもんだろ」と、菊丸にけしかけたのです。

菊丸はいわれるままに、縄をたよりに地下に降りました。畚は、またたく間に土砂でいっぱいになりました。

「おい、あげてくれ」

と、菊丸が叫んだ、そのときです。若者たちは、それまで掘りあげた土砂を穴の中に投げ入れ始めたのです。

「な、なにするんだ、ここから出してくれ」

菊丸は必死に叫びました。しかし、若者たちは止めようとはせず、とうとう菊丸を生き埋めにしてしまったのです。悪巧みとは、このことだったのです。

暗くなっても帰らぬ菊丸の身を案じ、とらは胸騒ぎを覚えながら、探し回りました。

そして、村はずれの山合いの辺りまで来たときです。

もの悲しい泣き声が聞えてきたのです。その出所を探しました。それは、新しく盛られた土砂の中からでした。

なんとそれは、菊丸の声だったのです。とらの驚きは一様ではありませんでした。

「おお、不憫なことよ、なんでこのようなことになってしまったのじゃ」

生甲斐を失ってしまったとらのその後は、見るも哀れなものとなっていきました。ゆうも心配でなりませんでした。

悪夢の日から数日後のことです。ゆうは都からやって

来た行商から、いま都の人々の心の支えとなっている「お念仏」の話を聞いたのです。

「これだ、とら、さんを救うのはこれしかない」

ゆうは、年老い、しかも生きる氣力をなくしかけているとらを伴って、都へ登ることにしたのです。

遠い道のり。それは決死の道行でした。

しかし、はるばる来た甲斐がありました。荒れ狂う戦乱の世にあつて、人々が心の安らぎを求めて称えるお念仏の声は、二人の心を洗ってくれたのでした。

「ゆうさん、ありがとう、これで菊丸も救われるじやろう、わしも、もう長くない、お念仏の声の中で死ねるとは、なんと仕合せもんじゃ」

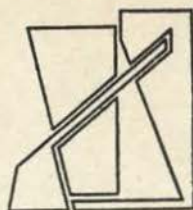
とらは、お念仏を称えながら息を引き取りました。

一人残されたゆうは、熱心にお念仏の教えを聞き、また称え、やがて、その深奥を極めました。

その後、郷里にもどったゆうは、菊丸やとらの御霊を守るため、とらが暮した一軒家を草庵にして、日々念仏の生活に入りました。こうして、このゆうの手厚い供養のおかげで菊丸も成仏し、ゆうも平穏な生活のなかに天寿を全うしたということです。

法然上人の弟子たち ⑥

津戸三郎為守のこと 〔二〕



梶村 昇 かじむら のぼる

(亜細亜大学教授)

津戸三郎為守が、父の居住する信州筑摩郡津戸郷から、いつ武州に移ってきたかは明かではないが、源頼朝が、治承四年(一一八〇)八月に、石橋山に旗挙げをしたときに、為守は十八歳で武州からはその幕下に馳せ参じている。しかし、頼朝は石橋山の一戦に敗れ、海路、安房国へ逃れなければならなくなるが、為守はそこへも供をしてついて行っている。この敗戦は、主従数人の一行だけと記録にあるから、先行きのことなど分らない全くの逃避行であったはずである。しかし、為守はそれを見捨てることもなく供奉していったところに、後年の彼を

思わせる純情さをうかがうことができる。安房に逃れた頼朝は、その後わずか二カ月足らずで奇跡の再起をして、その年の十月六日、早くも鎌倉に入る。そして十月十八日には富士川の戦いで決定的な勝利を得る。頼朝はその勢いにのって一挙に平安京・福原をつこうとするのであるが、有力な家来たちの意見をいれて、一応鎌倉にもどって東国の地固めに専心しようとする。そして十一月、常陸の豪族佐竹氏を破り、鎌倉での幕府体制の基礎固めをする。頼朝は、自軍に参加したものには所領権を保証し、敵対者から没収した所領を給与する等のことを

果断に実行した。

『九卷伝』はこの間の為守のことを次のように記している。

房州へ趣給ひし時も、同じく参向せしかば処々の合戦に忠をいたし、重々の御惑に預りしより以来、関東家人の名を得て、武蔵国御家人と号す



津戸三郎為守の画像―谷保天満宮蔵―

「^{けん}家人」とは、鎌倉幕府に属し、幕府から所領の安堵を受けたものをいうのであるが、この『九卷伝』の記事は、先の頼朝の行動に一致するものであって、その信憑性が確かめられるものがある。

為守は房州から富士川の戦い、そして佐竹氏との戦いに参加し、恐らく谷保の地一帯の所領の安堵を受けたのではないであろうか。

この後の為守について、谷保天満宮の社伝は次のように伝えている。為守は、天神島に祀られた菅公社に奉拝を怠らずとめていたが、ある夜、夢をみた。それは、夢に菅公が現れ、天神島の地を栗原郷谷保の里に転ぜよ、というものであった。為守はその夢のお告げに従って、かつて菅公の一子道武卿が配流されていた館の近くに社殿を造営し、ここに菅公像を遷座し奉った。これが現在の谷保天満宮であり、時に養和元年（一一八一）十一月三日であったという。養和元年とは、頼朝が富士川の戦い、佐竹氏との戦いに勝って、鎌倉に幕府体制の基礎固めをした翌年のことである。為守が合戦を終り、谷保の地に帰り、天満宮を造営したと考えれば、まったく符節を合したことになる。

なお、社伝によると、このとき、天満宮と合わせて、別当安楽寺と社務六院を置いた。すなわち、滝本坊、松本坊、桜井坊、梅本坊、尊住坊、邑盛坊の六坊であり、この統管には為守が当たった、とある。今はさびれた滝本房だけが墓地の中に残されており、その傍に「血文弥陀如来 法然上人作」と刻まれた石碑が一本立っている。

その後の為守については何の記録もないが、史書は、中央の血なまぐさい戦いを疑々と述べている。木曾義仲が平家を追って京を制し、それを範頼、義経が討ち、義経が平家を全滅させると、今度はその義経を頼朝が討つという修羅の世界を描いている。その後、その血ぬられた手で東大寺再建供養会にのぞむのである。信仰とは何であろうか。人間とは何であろうか。魔性と信仰、それが偽らない人間の姿なのかも知れない。

話は十五年ほどとんで、建久六年（一九五）三月、頼朝は妻政子ともども数万の軍を従えて東大寺落慶供養会に参列した。その供奉の中に、三十三歳になった津戸三郎為守は加わっている。『吾妻鏡』は、建久六年三月の条に、供奉の人々三百余名の名を書き連ねているが、残念なことに、ここに為守の名が出ていない。後に法然上

人の弟子となった大胡太郎（おおこ）や熊谷直実の一子小次郎の名は載っている。これらの人々は、「三騎相並、各家子郎従、同着三甲冑、列三傍路」とあるから、一応ここに名を列ねた人々は、一方の侍大将であつたとみるべきであろう。後陣の千葉新介などは「具一郎從数百騎」とあるほどである。為守はどこにいたかは知らないが、数万の大軍の中の一人であつたのであろう。

武士が戦いの場にあるときは、戦いに専心してほかのことに心を傾ける暇はない。それが武士にとつては、かえって生きるはりといえるのであろうが、戦いが終わって戦後の処理となると、ちょうど陸にあがつた河童のように手も足もでなくなり、政治にたけた人たちに苦もなく牛耳られてしまう。政治はまた特別の才能なのである。政治の不得手な武士たちは、その中であつて悶々の情に日を送る。それはもはや武士でも何でもないまったくの平凡な人間の世界にもどったということである。平凡な人間の世界とは、煩惱具足の人間の世界ということである。地位を得たもの、失意のもの、いづれも燃え盛る煩惱の炎の中に己れを焼き尽くすほどの思いにさいなまれるのである。煩惱具足というよりも、煩惱熾盛といった

方がよいかも知れない。

こう思つて、頼朝を大将とする数万の軍勢が、威風堂々と行軍しているさまを思い浮かべてみると、何のことはない。それはあたかも、人の世のみにくさが鎧をつけて行列しているようにさえみえる。といつて、それは何も頼朝の行列に限ったものではない。東大寺落慶法要に集った人々すべてにいえることであるし、生あるものすべての姿でもある。

為守は三月四日入洛、二十一日に法然上人を訪ね、「合戦度々の罪障を懺悔、念仏往生の道をうけ給」つていゝ。為守の心中がどうであつたか、今はうかがう術もない。「合戦度々の罪障の懺悔」という記事を疑うわけでもない。ただこのような武士が宗教に帰依する際に用いられる常套語だけでは、為守の悲しみは尽くせないものがあつたのではなからうかと思うだけである。為守の人となりは愚直なまでに純心である。この純な心で、鎌倉幕府の人間関係を眺めたならば、それは修羅以下の世界に思われたであらう。すでに前々年の建久四年（一一九三）には、熊谷直実が法然上人の門を叩いている。また、その前年の建久三年には、武蔵七党とよばれた猪俣

党の甘糟太郎忠綱も法然上人の門に入っている。恐らく為守は、関東にいたときにこのことを承知していて、みずからもその日の来るのを待っていたのではないだろうか。

法然上人はすでに大原において、また東大寺において、末法の世に万人の救われる念仏の道を説いていて、その名声は隠れもなかった。為守はためらうことなく、京都吉水の庵へ上人を訪ねていったものと思われる。

頼朝は京に滞在すること五カ月ほどで、七月には下向し鎌倉へ着いている。五カ月にわたる在京の間、為守はたびたび上人を訪ねている。「在京の間も常に参りて」と『九卷伝』は記している。為守は頼朝の下向とともに一応、関東へ帰った。「下向の後も更に他の門を望まず、但信称名の行者と成て、念仏の行おこたらざりける」とあるように、下向後の為守は念仏に目を送っていたもののようにある。しかし、これが人々に奇異の目でみられたのであらう。口さがない人々はいった。「熊谷入道や津戸三郎は、無智のものだから、經典を讀んで学問したり、むずかしい仏道修行をしたりすることができない。そこで法然上人は、念仏だけを称えればよいと教え

られたのであって、利口な人にはその他のみちを教えられるのだ」と。

恐らくこういう噂は相当広く伝わっていったのではなからうか。それというのも、甘糟とか熊谷とかは、当時の記録にも名を残しているほどの錚々たる鎌倉武士である。その人たちが専修念仏に帰し、今また津戸三郎がその一人となったのであるから、これは当時の大事件であつたと考えてよい。それだけにこうした噂は広まつて、鎌倉の幕府にも聞こえ、為守自身の耳にも入つたことであらう。

為守は動揺したかも知れない。そこで、思いきつて法然上人に手紙を書き、ありのままを述べ、同時に、日頃思っている疑問を書きつらね、上人の答えを待つたのである。聞きたいことが山ほどあつたのであらう。

法然上人から長い長い返事がきた。

お手紙詳しく承りました。お尋ねになられたことを大体ここにご返事いたします。熊谷や津戸は無智だから念仏をすすめたのであって、有智の人には必ずしも念仏に限らず他の行をすすめるとお聞きになられたそうであるが、それは「キワメタルヒガ事ニ候。ソノユ

ヘハ念仏ノ行は、モトヨリ有智無智ニカギラズ、弥陀ノムカシチカヒタマヒシ本願モ、アマネク一切衆生ノタメ也」

そして、これを証明するように經典まで引用して長い説明がつけられていた。

ついでこのあとに、為守からの質問に答えてのことであらうが、

一、異解の人々のために財を施し供養し、結縁助成することは専修の妨とならないということ。

二、念仏の心を知つた上で神仏祈禱することは差支えないこと。

三、念仏を申すには、心に願をかけ、口に名号を称え、行住坐臥、時処諸縁をえらばないこと。

四、異学、異解の人々と論争して、罪をつくらぬこと。

等々がことまかに記されていた。『九卷伝』も『西方指南抄』も、この手紙は「九月十八日」と記しているが、何年の九月十八日かははっきりしない。

(つづく)

浄土句集

一田牛畝選

東京 阪入 等達
産土神に皺の手合せ初詣

福岡 高良 慈風
毛糸編む眼鏡かけたりはづしたり

福岡 増谷 雄鳳
神棚は男の役の煤すす払はらい

京都 安藤 寛
晋山しんさんの緋衣僧紅葉の黒谷へ

福岡 荒牧 還愚
本山の縁広々と日向ぼし

評 年の瀬になると女は何や彼となかなか

評 これは西の晋山式で、藤原法主の緋衣

忙しく猫の手も借りたい位である。神棚の煤すす払い位は男にやって欲しいがなかなかやってくれないのに、この作者は妻にやさしく、檀家の人々にも親切らしい。

と黒谷の紅葉とが、対象的で絵草紙を繰りひろげたようである。藤井、藤原と「下がる程人の見上げる藤の花」で、きつと見上げ拝まるる両法主の晋山式を挙げられた両本山の誇り、如何ばかりならん。

東京 真野 竜
冬晴や三門朱傘に紙散華

東京 猪瀬 幸子

わらんべの唄そのままの雁の列

東京 真野よし子

評 朱の傘を差し掛けられて居られるのは新しい増上寺の藤井法主らしい。その晋山の行列が三門をくぐる時、衆僧が紙散華を撒いている光景は何とも言い得ぬ雰囲気で、いとも厳肅である。

日溜りの落葉ふり梅に腰おろす

古暦半月残し退院す

福岡 国友 星畝

山形 松田 允子

福岡 原 敬二郎

福岡 服部 光代

兵庫 山口 諦存

福岡 国友 星畝

東京 鈴木 葉子
指先の脂を氣にして松手入

大阪 大崎 羊華
青年の力にまかせ除夜の鐘

東京 栗原とも子
限りなく降りくる落葉の中に佇つ

東京 島居 千代
秋晴や染糸干せる伊賀上野

山形 松田 光譽
お仏間の障子張りかへ仏事かな

東京 末常てる子
掃き寄せし落葉のさまのいろいろに

東京 阪入志津枝
花一つかかげて草の末枯るる

群馬 島津 か寿
お地藏の台座に銀杏散り重ね

福岡 前田 秀峰
十夜諷誦心に浮ぶ父と母

福岡 永江 隆説
白鷺の舞ひるる下の田植かな

滋賀 松尾 郁芳
甘酒の出来も上々十夜かな

福岡 新森 耕春
檀用に風邪とて休み許されず

東京 田中 秀代
大根の切れ味の良き朝かな

長野 原 幽遊
浅漬に食のすすみし坊泊り

象よりも巨く涅槃し給へる 一田 牛畝

東京 栗原やえ子
柿熟れて夫の好みし胡麻酢和へ

三重 森 静枝
先づ寺へ年賀の足を向けにけり

東京 吉原とき子
満天星の円く刈られて紅葉せる

東京 一瀬 重子
折鶴に入試托していちらしく

山口 上野 明達
朝霧に黒衣ゆかしき加行僧

千葉 菅 ます
山茶花の盛りも過ぎて庭淋し

◇ "浄土句集" 欄へ!! ◇

ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい。一人でも多くの俳友をお誘い下さい。まして、たくさんさんの投句をして下さい。

投稿先――

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田 牛畝先生宛

西行と仏教 (一)

—出家棄世の真意—

河こうの野の喜よし雄お

(文芸評論家)



一 西行の略歴

西行円位は、俗名、佐藤義清(一に惠清)で、鳥羽天皇の元永元年(一一一八)、従五位下左衛門尉康清の次男(?)として生れた。

佐藤家の遠祖は、左大臣藤原魚名の五男、藤成であり、その四代目、藤太秀郷は、平将門の乱を鎮定した功により、従五位下武藏守となり、鎮守府將軍に任じられてい

る。秀郷の七代目が陸奥国押領使となった清衡であり、基衡、秀衡と続いて平泉三代の榮華を誇ったことはよく知られている。

秀郷の次男千常の四代目公清より佐藤家となり、康清まで三代に亘って、従五位下左衛門尉に任じられており、そして義清もまた鳥羽院の下、北面の武士として左衛門尉に任じられている。

武將の家系に生れたため、幼少より武術、兵法を学び、その方面でも尤に一流級であったのであろうが、それよりも何より

も、彼が生来大度の天才的人物であったことは、有名な文覚上人との逸話に、克くこれを推することが出来る。

かねがね西行を憎み、出会ったら頭を打ち割ってやろう、とまで常々言っていた文覚が、偶々高雄山の法華会に來た文覚に一夜の宿を乞われた時、しばしその顔を打睥した後、懇遇して帰した。そして、弟子たちとその理由を問われたとき、

「あの西行は、この文覚に打たれむずる面様が、文覚をこそ打たむずるものなれ」

と答えた、というのである。以てその風貌を察すべきであろう。

その西行は保延六年（一一四〇）十月十五日若冠二十才（満）にして出家した。

一には身分の高い女性との失恋の爲と言われ、一には共に北面の武士であった佐藤左衛門尉憲康の急死に無常を感じてのことと伝えられているが、私見はいささか異なる。

「西行物語」によれば、憲康の死を聞いて、出家の決意を固めて帰宅した西行は、縁先に出迎えた四才の女兒が、喜んで袖に取付こうとしたのを、庭先へ蹴落した、と言われるし、「山家集」には、「鳥羽院に出家のいとま申すとてよめる」と前書して、

をしむとて惜しまれぬべきこの世かは
身をすててこそ身をもたすけめ

と詠まれた一首がある。

その前の逸話は、彼の出家の覚悟の程が察せられるし、「山家集」の一首は、同集および「詞花集」中の、

身をすつる人はまことにすつるかな

捨てぬ人こそ捨つるなりけれ

（本歌は、後に初句「世を捨つる」と改められた）の一首とも思い合わせて、出家、脱俗自体に、彼が彼自身の、真の自己を生き抜き、生き通し、生き切ることを見出し、いた事実を、尤に推せしめる。

素より勇武の彼であつたろうが、若冠二十才にして、すでに「身をすててこそ身をもたすけめ」と詠み得たところの彼は、その詠歌自体の超凡さもあることながら、そこには、ハッキリと彼自身の哲学が吐露せられており、鋭敏の天才であつた彼は、その時すでに古書・經典、ことに仏教經典を相当読破し、その哲学をマスターしていたのではないかと考えられる。

そして、その彼の哲学には、当代における彼自身の社会的境遇、その地位・身分——というものが、大きく作用していたのではないかと、私は思われる。

當時は藤原氏權權時代の末世、平安朝後

期であつて、末世とは雖も、平安朝宮廷における藤原氏權權体制はまだ絶対的であり、藤氏によって定められたところの「先途」というものがあつて、その家格によって官位昇進の限度が定められており、如何なる鋭才・俊哲といえども、またたとえ皇親・名族といえども、その「先途」以上に出世・榮進することは認められなかったのである。

そして、上述のように稀有の鋭才・大度であつた西行のような人物が、そのような環境裡に閉居・蟄居していることに、一生に一度しか生きられないその人生の「生ける証し」を感じることが出来ず、一大決意を以て、すなわち、わが娘を縁下に蹴落すほどの、激しい意圖を以て、その所与の環境を、敢然・超脱したのであることは、ほぼこれを推することが出来る。この点に就ては、後章に詳述する。

出家した西行は、高野・吉野に隠遁、棲居して、専ら歌道に専念するとともに、また出でては諸國を遍歴した。東は遠く陸奥に至り、西は中國・四國・九州に及んで、

その足跡は殆んど全国に遍ねく、晩年は伊勢に在ること数年、また上洛して洛東雙林寺のほとりに庵居し、後に河内に移つて、そこで建久元年（一一九〇）二月十六日、かねて、

願はくは花の下にて春死なん

その如月の望月のころ（山家集）

と歌つていたように、仏滅近くに死んでいたのである。享年七十二才であつた。

二 その歌業

西行は出家・入道した。出家・入道したのであるから、もちろん、仏典は勉強したであろうし、その哲学の深奥を悟得するとともに、自身の出家の覚悟を、いよいよ聲固ならしめたに違いない。

鳥羽院に「出家のいとま申すとて」例の歌を詠んだのは、若冠二十二才であつたのだが、後の「詞花集」・「山家集」に入集している、前掲、

世を捨つる人はまことにすつるかは
捨てぬ人こそ捨つるなりけれ

の一首の作歌年代は、西行三十三才の仁平元年（一一五一、同年奏覧）と推定せられており、その歌意には、ハッキリと、その十一年間におけるところの、彼自身の悟道、その哲学の深化が窺われ、その歌格も、遙かに前首を超えている。

しかしながら、その西行が、仏教面において残したところの業跡と言へば、

(1) 高野山に居たころ、安元元年（一一七五）五十七才、鳥羽天皇の第七皇女、五辻斎院が、蓮華乗院を建立せられた際、その事務を担当し、

(2) 治承元年（一一七七）五十九才のとき、その蓮華乗院の柱絵の勸進にも成功、

(3) また紀伊国一宮日前宮の造営料が高野山領に課せられた時、その免除を平清盛に申請して、その承諾を得ている。

程度のもので、何ら新筆すべきほどのことをやってはいらず、出家後のほぼ五十年間

は、吟詠・遊行のみに専念しており、その遊行も、隠遁詩人としての吟詠のための必然的要請によるものと、考えられるのである。

その吟詠の大様を、「山家集」に窺つてみよう。

先ず彼の哲学、仏教に「入道」したのであるから、もちろん仏教哲学的な色彩が濃厚であるが、その哲学・人生観を詠んだものを挙げてみよう。

世にあらじと思ひける頃、云々
それになる心は春の霞にて

よにあらじとも思ひたつかな
世を厭ふ名をだにもさはとどめ置きて
数ならぬ身の思ひ出にせむ

花もちり人もこさむ折は又

山のかひにてのどかなるべし

ねがはくは花の下にて春死なん

そのきさらぎのもち月の頃

惜しまれぬ身だにも世にはあるものを
あなあやにくの花の心や

もろともに我をも具してちりね花

うき世をいとふ心ある身ぞ
山吹の花咲く里に成ぬれば

ここにもいでおもはゆるかな
西にのみ心ぞかかるあやめ草

この世ばかりの宿と思へば
みな人の心のうきはあやめ草

西に思ひのひかぬなりけり

月のうたあまたよみけるに (二首)

何事もかはりのみ行く世の中に

おなじかげにてする月かな

ながむればいなや心の苦しきに

いたくなすみそ秋の夜の月

世をのがれて鞍馬の奥に侍りける

に、かけひの水にて水までござりけ

るに、云云

わりなしやこほるかけひの水ゆえに

思ひ捨ててし春の待たるる

あはれしりて誰か分けこむ山里の

雪降り埋む庭の夕ぐれ

さびしさに堪へたる人の又もあれな

いほりならべん冬の山里

いつかわれこの世の空を隔たらむ

あはれあはれと月を思ひて

今よりは厭はじ命あればこそ

かかるすまひのあはれをもしれ

折しもあれ嬉しく雪の埋むかな

きこもりなむと思ふ山路を

よしさらば幾重ともなく山こえて

やがても人に隔てられなむ

山ふかみ入りて見と見るものは皆

あはれ催すけしきなるかな

しをりせで猶山深く分け入らむ

うきこと聞かぬ所ありやと

山水のいつ出づべしと思はねば

心細くてすむと知らずや

さらばたださらでぞ人のやみなまし

さて後もさはさもあらじとや

なげけとて月やはものを思はする

かこち顔なる我が涙かな

我ばかりもの思ふ人も又もあると

唐土までも尋ねてしがな

いくほどもながらふまじき世の中に

ものを思はでふるよしもがな

とにかくにいとまはほしき世なれども

君が住むにもひかれぬるかな
世の中をそむきはてぬと云ひおかむ

思ひしるべき人はなくとも

とふ人も思ひたえたる山里の

さびしきなくば住みうからまし

入日さす山のあなたは知らねども

心をぞかねておくり置きつる

さまざまのあはれありつる山里を

人につたへて秋の暮れける

世を捨てぬ心のうちに闇こめて

迷はむことは君ひとりかは

前大納言成通、世をそむきぬと聞き

て遣しける

いとふべきかりのやどりは出でぬなり

今はまことの道を尋ねよ

いかがすべき世にあらばやは世をもす

てて

あなうの世やと更に思はむ

何ごとにとまる心のありければ

更にしも又世のいとはしき

濁りたる心の水のすくなきに

何かは月の影やどるべき

いづこにか身をかくさまし厭ひても

うき世にふかき山なかりせば

西を待つ心に藤をかけてこそ

そのむらさきの雲をおもはめ

いかでわれこよひの月を身にそへて

しでの山路の人を照らさむ

捨てたれどかくれてすまぬ人になれば

猶よにあるに似たるなりけり

世の中を捨てて捨てえぬ心地して

都はなれぬ我が身なりけり

捨てし折の心をさらにあらためて

みる世の人にわかれ果てなむ

越えぬれば又もこの世に帰れこぬ

死出の山こそ悲しかりけれ

今よりは昔がたりは心せむ

あやしきまでに袖しをれけり

見ればげに心もそれになりぞ行く

枯野の芒有明の月

いづくにかねぶりぶりにたふれふさむ

と思ふ悲しき道芝の露

ひろむらむ法にはあはぬ身なりとも

名を聞く数に入らざらめやは

山のはにかくるる月をながむれば

我も心の西に入るかな

いかにして聞くことのかくやすからむ

あだに思ひてえつる法かは

驚の山くもる心のなかりせば

誰も見るべき有明の月

驚の山誰かは月を見ざるべき

心にかかる雲しななければ

野辺の色も春の匂ひもおしなべて

心そめたる悟りにぞなる

命をしむ人やこの世になからまし

花にかはりて散る身と思はば

如上の風詠によって、彼が当時の現世、

その世俗を厭って捨身・出家し、いわゆる

「脱俗超俗」的隠遁をしたものであること

は疑いなく、しかもその隠遁は、「世を捨

つる人はまことに捨つるかは」の一首にも

明らかなように、彼自身の一生に一度しか

ない人生自体を捨つるものではなく、捨つ

ることによって、却ってその人生を生き通

し、生き切ることであり、いわゆる「在俗

超俗」の大隠の境地であった。その彼にと

っての、無二の教典となり、その哲学を深

化、高揚せしめたものこそ、他ならぬ仏教

であり、彼の詠歌にいう、いわゆる「法」

であった。

そして上掲歌のいくつかは、彼がその最

後・最高の心象に引達するまでに、何らか

の契機によって、幾たびかその「法」の真

理、その高遠なる哲理を、思い直し、思い

改めつつ、遂に「野辺の色も春の匂ひも」

の一首に見るような、いわゆる「悟り」の

境地を体得している事実を確認することが

出来る。

後章においても触れるが、道元の「正法

眼蔵」山水経の劈頭に、

「而今の山水は古仏の道現成なり」

という偈がある。私どもが現前に見る山河

草木の春夏秋冬のそれぞれの姿容・風貌の

裡に、実に釈迦の説いた仏道が、宛然、現

成されている——というのであって、これ

は、西行の上掲歌にソックリではないか、

と私は考える。私たちは、このような西行

の心象を、もう少し探究してみようではな

いか。

(以下次号)



信仰への道

『無量寿経』に説かれていること(三)

吉村孝

『無量寿経』の初めの方に釈尊の八相(釈尊がその一生に経過した八種の相)の要約が書いてあります。仏教の教祖釈迦牟尼仏の一生を簡単にでも知ることは仏の教えを一層堅固に信ずることが出来ます。經典に書いてあることは譬えであつても、何気ない説明であつても、また、偈のような純粹なものは勿論のこと、あらゆる言葉が皆教えになっております。従いまして釈尊八相の説明の中にも重要な教えが幾つも含まれております。

その八相とは受胎から始まり、出生、処宮、出家、降魔、成道、転法輪、入涅槃の八つであります。

一の受胎は、兜率天に処して(将来、仏となるべき菩薩

が住む処で、釈尊が修行した所)、そこに於て、正法を弘宣(ぐま)しかの天宮を捨てて(正法を弘めて後、そこを離れて)、神(人間を超越した宗教的な力)を母胎に降す(受胎したということ)。

これは釈尊自身のことですから、この経文は誠に不思議に思われますが、世間の人から超越した仏の実体を文字を以て表現することはできませんのでこのような形で書かれているのであります。

二の出生は、右脇より生れて、行くこと七歩を現わす(生まれると直ちに七歩歩きました)。光明(煩惱・罪惡の暗黒を照して、信仰上の悟りを与えるもの)は顕耀(あらわす)

して、普く十方（四方と四隅と上下。宇宙全体のこと）を照らし、無量の仏土は、六種に震動す（譬えて、めでたい事の兆しに仏土が感動すること）。（今は菩薩で後の釈迦牟尼仏は）声を挙げて自ら称う、吾れ当に世に於て無上尊と爲るべし（自分は世の中で最も尊いものとなる）と。積・梵（帝釈天と梵天）は奉侍（釈尊のそばに落度がないように控えている）し、天・人（神々と人間）は帰仰する（帰依し深く信仰仰すること）。

ここに光明が説かれていますが、これは仏の力の中で最も重要なことで、光明とは煩惱・罪惡の暗黒を照らし出して、それらを消滅し、仏の悟りを与えてもらうことです。それから、釈尊の經典を正しく学び実践することによって、この光明を受けることができるのであります。これが功德であります。

三の処宮は、算計・文芸・射・御（数学・学問芸術・弓術・象馬を巧みに馴らすこと）を示し、博く道術（道德と學術）を綜い、群籍（多くの書物）を貫練（善いものをより分ける）す。後園に遊んで武を講じ芸を試む（後宮の園では武術を説き明かし、技能を試みる）。宮中にありては、色味の間に処する（妻をめぐり、五欲に耽けり愛欲の生活をな

すこと）ことを現わす（行なっている）。

ここでは釈尊が宮中にいた時の学業・技芸の鍛練や女性関係の狀態が述べられています。成道後この女性が魔となつて修行の妨げになる事が經典に出てきます。

四の出家は、老・病・死を見て世の非常を悟り（世の中には常に老・病・死の変化の苦があることを悟り）、国と財と位を棄てて山に入り道を学ぶ（釈尊は皇子の位と生れた国と財産を棄て家を出て山に入って仏道を学ぶ）。服乗の白馬・宝冠・瓔珞は、これを遣わして還さしむ（棄てて来た白馬や冠や飾り物を御者に与えて還させた）。珍妙の衣を捨てて、法服を著し、鬚髮を剃除し、樹下に端坐す（美しい衣を捨てて、出家の衣を着て、ひげと頭髪をそり落して樹下に正座した）。勤苦すること六年、行、所応の如くす（六年間苦行してその修行は出家者の辿る道をいそしんだ）。

釈尊は目の当りに老・病・死の世の中の無常（常に變化して止まらないこと）を見て悟り、国と財と位を棄てて山に入つて道を学びました。釈尊がこの無常の解明の為に有形無形の財を捨てた事は私達がいくらか心を固くしても仲々実行できることではありません。修行の前に本当に身一つになった決意は、今も私達が一つの計画を立てる

時の手本を与えられたものとして考えさせられます。

五の降魔は、五濁（劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁の五つで人間が避け難い汚れのこと）の利（国）に現われしかば、群生（多くの人）に随順（おとなしく従う）して、塵垢（煩惱のこと）ありと示し、金流（尼連禪河）に沐浴（水浴）す。天（神）は樹枝を按えて（つかまえて）、池より攀じ出ずることを得しむ（釈尊が六年間の苦行の爲身体が疲労して池からやっとよじ登ることができた）。靈禽（うるわしい鳥）は翼従（たすけて従う）して、道場（釈尊の菩提樹下の座）に往詣（至る）す。吉祥（吉祥草）をもつて感徴（菩薩が成仏するであろうことを仏が予知すること）して、功祚（仏の悟り）を表章（あらわす）す。哀みて施されし草を受け（慈悲の心をもつて施された草を受けて）、仏樹（菩提樹）の下に敷き、跏趺（禪を修する時足を組む姿勢）して坐す。大光明を奮（光明は前にあります、その光明を振り動かすこと）、魔（釈尊の説く魔は煩惱のことで、經典には惡・邪・賊・魔等の文字で現わしてあります）をして之（成仏して光明が得られたこと）を知らしむ。魔は官属（眷属）を率いて、来りて逼り試む（釈尊の悟りを妨けて墮落させようとした）。制するに智力を以てし（逼り来た魔を釈尊は智慧の力を以て抑え

止める）、皆降伏せしむ（皆、自ら破れたことを認めさせた）。

釈尊は皇子の身から出家を決意して修行の道に入った人ですから当時は最高の生活をしていました。修行して悟りを得たといいますが、釈尊も人間ですから菩提樹の下で座禅で心を静めていても、時には元の生活を想い出すことがあります。釈尊はこの妄想を魔として、この降魔はその時の煩惱を消滅した事が書かれているのであります。

大光明を得ていることを魔に知らせて仏の智慧を以て魔を降伏させたとありますように、光明によって煩惱・罪惡の暗黒を照らして明らかにして、仏の智慧の力によって暗黒を消滅することが釈尊の教えの根本であります。仏道を修行している人はここに説かれている光明と智慧は『無量寿経』にも一貫して説かれてありますので心に留めておきたいと思ひます。

六の成道は、微妙の法（釈尊の悟った法で、縁起の理法のこと）を得て、最正覚（無上正等覚を略した言い方で仏の悟りのこと）を成ず。

前にも仏の智慧に就いて書いてありましたが、成道は釈尊の最も重要な事でありますので一代記などの中核を

なしております。

七の転法輪は、釈・梵（帝釈天と梵天）は祈勸して（す
すめて）、法輪を転ず（仏の教化がよく転じて至り尽すことを
車の輪に譬えた語）ることを請う。仏の遊歩をもつてし
（仏のようにそぞろ歩きをして）、仏の吼をし、しかも吼す
（仏が大声で説法するように、大声で説法する）。法鼓（つづ
み）を打ち、法螺（楽器の法螺貝）を吹き、法剣（ほうけん）を執り
（煩惱を断ち切る剣を持つこと）、法幢（ほうとう）を建て（真理の旗を建
てる）、法雷（ほうらい）を震い（大雷音を以て説法してその場の聴衆を
震い起したせる）、法電（ほうでん）を曜（かがや）かし（空中を走る稲妻のように説
法を輝かす）、法雨（ほうう）を澎（ふ）ぎ（説法を雨に譬え、それを大衆に降
り注ぎ）、法施（ほうせ）を演（は）ぶ（仏法の施しを広く及ぼす）、常に法
音（説法）をもつて、諸の世間（世間の人々）を覺らし
む。

光明は、普く（広く）無量の仏土（浄土）を照らし、一
切の世界六種に震動す（浄土が光明に照らされて無量の信
仰者が大いに功德が得られたので世界中が感激する）。総て
（全部の）魔界を撰（えら）び（煩惱を全部一まとめにして）、魔の
宮殿を動かさんがためなり（総ての煩惱を魔の宮殿に譬え
て、その宮殿に強い震動を与えて崩壊するためである）。諸の

魔は恐怖（おそれる）して、帰伏（きふく）（従って服する）せざるは
なし（皆服従した）。邪網（じやもう）（諸の邪な思想）を摑（つか）って（打つて）ば
らばらにするし、諸見（しよけん）（諸の悪しき見解）を消滅し、諸の
塵勞（じんろう）（煩惱）を散（さん）じ（ちりちりにする）、諸の欲壺（よくろう）（深い欲
望）を喪（な）ちて（壊して）、法城（ほうじやう）（真理の城）を蔽護（へいご）す（きび
しく守る）。法門（はふもん）（教え）を開闡（かいせん）して（開き現わして）、垢汚
（こうぶ）（煩惱のこと）を洗濯（せんたく）（洗って除くこと）し、清白（しやうびやく）（汚れた
いこと）を顯明（けんめい）（明らかに現わす）す。仏法を光融（こうよう）（正法を
輝かして邪見の者をその光の内に摂めること）して、正化（しやうけ）（正
しく導いて変えること）を宣流（せんりゅう）す（広く説き伝える）。国に
入りて分衛（ぶんゑい）（扞鉢すること）し、諸の豐膳（ほうぜん）（国土・長者か
ら供養された珍味の食物）を獲て、功德を貯えしめ（種々の
供養をしたことにより人々に功德を貯えさせて）、福田（ふけん）（仏又
は出家に供養すれば、供養者自身がその布施の功德によつて福
徳を得る故に福田という）たることを示す。教えを宣べん
と欲して（説法しようとして）、欣笑（こんせう）（心がうきうきする笑み）
を現わし、諸の法藥（はふやく）（教え）をもつて、三苦（さんく）（精神的肉体
的の苦、自己の愛着するものが破れる時の苦、世の無常を感じ
て得る苦）を教療（きやうりやう）す（救い治す）。道意（だうい）（仏道に入る心）の無
量の功德を顯現（けんげん）（現わす）して、菩薩に記（し）（仏が修行者の未

來の成仏を予言すること）を授け、等正覺（仏の悟り）を完成せしめたもう。

八の入涅槃は次回に廻します。

この『無量寿經』には他の經典に見られない程非常に詳しく書いてありますが、それは『無量寿經』の仏は信

者に仏の実践を形に示してそれを真似る教え方をしたものですから經文は非常に判り易くその通りに行えば、その積み重ねにより自然に功德が得られる教えなのであります。これは親が子を仕付けるのと全く同じであります。

（つづく）

◆年会費値上げのお願い◆

◎新年会費 二、五〇〇円

〔昭和五十四年四月より実施―
『浄土』四十五卷・四月号以降〕

諸物価の高騰と諸般の事情により、しばらく頑張つてまいりました当法然上人鑽仰会の会費を、従来の一年分二、〇〇〇円から、表掲の一年分二、五〇〇円の新会費に値上げさせていただきます。新会費を実施するのは、一応本年昭和五十四年の四月（『浄土』四十五卷、四月号）以降からといたします。諸種の便宜をはかり、充分に意を尽してことに当るつもりです。どうか会員の皆様の暖かいご配慮とご援助をくれぐれも宜しくお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

Ⅱ 新刊紹介

和 訳 上人 選択集

村 瀬 秀 雄 著

弊会同人でもあられる村瀬秀雄師（淑徳短期大学講師）が、このほど新たに上梓されたのが本書である。村瀬師は数年前より、浄土念仏信仰にとっては欠かすことのできない基本的な経論を、平易流麗な現代語に和訳することを試みられてきた。先に刊行された『和訳浄土三部経』、『和訳善導大師観經四帖疏』の二書がそれで、ここに本書と併せて、村瀬師の当初念願の和訳聖典三部作が完結したのである。時あたかも、浄土宗では、高祖善導大師千三百年のご遠忌を間近に控えて、一宗の教学をさらに振興させようという期にあたり、この村瀬師の労作がまたひとつ新たに提示されたことはまことに意義深いことである。

さて本書の内容は、すでに村瀬師の和訳作業の一連の試みで用いられている独特な体裁で、初学者にもわかりやすく、簡を得

て、またよく意を尽した解説と訳文である。法然上人の名著『選択本願念仏集』は、全十七章段から構成されているが、本書では各章ごとにいくつかの区節を付けて、それぞれの教説内容を整理されている。その一々の形式は、最初によくこなれた現代語による訳文が示され、次にその内容を補足説明するために、法然上人のご法語の引用と解説を活字を落として注書きのような形で詳述する。そしてその後で、上段に原文をレ点付きの漢文で載せ、下段には旧来の書き下し文を、それもなるべく平易な記述をもって明示し、その書き下し文には詳細な辞典風の注書きが後述されることになっている。

本書の特徴は、なんといっても法然上人のご法語を三百余回引用して、これを併せて解説しながら、法然浄土教学の核心の書

物である『選択集』の内容を理解するための一助としていことである。巻末に付された「法然上人ご法語一覽」の索引によって、法然上人の有名なご法語を速座に検索できるのも好都合である。また書き下し文中の難解な語句の注書き説明も、実に当を得て、また要を得ているのも、流石であるといわざるをえない。なお付録として、平基親の「選択本願念仏集印刻の辞」が、現代語訳と原文、書き下しを添えて集録されていることを付記しておきたい。

ともかく本書は、村瀬師の積年の教学研究及び教化の成果によつてはじめてなったものであり、この含著の深い訳文が一朝一夕の仕事でないことは、つとに明白である。（原）

△B6判・三八七頁、上製函入、価二五〇〇円、昭和五十四年二月刊／＼（発売元）

〒256 小田原市国府津五一四一四九

常 念 寺

（〇四六五）四三一―一三五二
振 替（横浜）八二九六番



念佛ひじり三國志 (弐)

— 法然をめぐる人々 —

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

法然は七箇条の項目に分けて門弟たちを誠しめた。この七箇条制誡を遵守することを誓わせるべく、門弟に署名を求めた。

元久元年(一二〇四)の十一月七日から三日間にわたり門弟たちは嵯峨の二尊院へ集り署名した。初日が七十九名、二日目が六十一名、三日目は四十九名、合計百九十名となっている。交名簿は二尊院に現存している。

何がきっかけで七箇条の制誡がなされたのか。法然諸伝は相似した文章で経緯を明らかにする。

元久元年冬ノヨロ山門大講堂ノ庭ニ三塔会合シテ
專修念仏ヲ停止スベキヨシ座主大僧正真性ニ訴エ
申シケリ
(四十八巻伝)

琳阿本や古徳伝は天台座主を顯真としているがこれは誤記である。顯真座主は十二年も前の建久三年に寂している。そのあとは九条兼実の弟慈円が座主の地位にあった。そして前年の建仁三年八月六日、真性にゆづったのである。

おそらくこの交名簿は制誡の文章に添えて比叡山延暦

寺へ提出されたものである。誠意帰順を表面して「念仏停止」の弾劾をかわしたことを思われる。現実には、北嶺の追究はこのあたりで和らぐ。次の告発は南都から「興福寺奏状」によって起されている。

比叡山と法然との和解者は、当然門下にあった天台僧たちであろう。主軸は正信房湛空だったに違いない。

湛空は先に九条兼実へアプローチして嵯峨二尊院の復興に専念した。慈覚大師の遺跡を復元することで法然の念仏を天台正統のものだ、と主張したかったようである。内に「唐相承」の実績を作り、外には過激派をいましめる、という両様の防禦策を選んだ。だから署名もその二尊院で書かせたのであろう。

しかし交名簿には湛空自身の名がない。また湛空の和解を側面から助けたはずの隆寛律師や聖覚法印ら法然門下における有力な天台僧の名も欠落している。

交名簿は筆頭に黒谷以来法然の法弟だった信空をあげ、感聖、尊西、証空、源智ら吉水の禅室に起居する法然の内弟子たちが上位を占める。問題の人安樂房遵西、法本房行空の名もある。一念義幸西、住蓮、空阿弥陀仏、欣西、西意から熊谷直実の蓮生や親鸞の緯空までが

前号のあらすじ

久我通親の死後、廟堂における卿二位藤原兼子の台頭には目覚しいものがある。卿二位兼子に比して浄土寺二位高階榮子（丹後局）の対照的な凋落ぶりは、策謀に生きた者の迫る悲しい運命であったのかも知れない。後白河法皇崩御の際、法皇に見染められて産み落した一人娘宣陽門院勸子の名儀で強引に長溝領を手に入れた頃が高陽榮子の絶頂期であったと言える。ところが念願の娘の後宮入りは、味方であるはずの久我通親によって足元をすくわれた恰好となり、そのうえ、宣陽門院は、ある日行方不明となってしまう。法本房行空が無道な出家をさせたという。

法本房行空にとって、これは身に覚えのない濡れ衣としか言えない事件であったが、やがて法然上人の率いる専修念仏教団に大きな波紋を及ぼすことになる。

ふくまれている。

いちおう当時の念仏ひじりを網羅しているが、いま触れた天台僧たちの欠落には引くかかものがある。和解者の立場だったから、という理由だけでは薄弱過ぎる。

法然諸伝がみな七箇条制誡を書いた、としたが例外がある。聖覚の「黒谷上人伝」や隆寛の「法然上人秘伝」は一行も触れようとはしなかったのである。完全に無視した感じである。

これは、どういふことであらうか。

その後の経緯から推察してみてもこの制誡が遵守された気配は全くない。専修念仏者たちは、前にまして過激に既成教団を罵倒し、持律持戒の人を雑行人として蔑視した。唱導を好んで無智の道俗を教化した、のである。

だからこそ「興福寺奏状」の告発を招いた。

内側からの制誡にしても、法本房行空を唯一人だけグループから追放したにとどまっている。行空の場合には「殊に不当」と彼の行状が、ことに女淫の点で人倫にとる、という特殊ケースなのだ。六時礼讃を常行三昧堂のような修法場所を離れ、在家室で男女混声で興行する安楽房遊西などは一切不問に付している。

となると、二尊院の交名簿には別途の意義がふくまれていた、と考えなければならぬまい。

入門して未だ日の浅かった親鸞の綽空やさらに一年遅れて法然門に参じた長西までもふくめてゐる。長西は後に九品寺義流を樹立した有力な法然の法嗣だが、当時は未だ二十歳そこそこの青年ひじりに過ぎなかった。なぜ親鸞や長西を加えて、有力な天台僧たちを除外したのであらうか。すでに鎮西へ去ってしまった聖光房弁長が欠

落しているのは当然だとしても……いや、弁長が在京していたとして交名簿へ名を列ねていたかどうかとも疑がわしい。

二

その日、明遍は一条北小路、大宮通りにある安居院へ出かけていった。その日とは、嵯峨の二尊院で署名が終つて幾日も経っていない午後であった。兄澄憲の追善回向に参じようと思ひ立ったからである。

兄澄憲は、信西入道の第七子、高階重仲の娘を母としている。明遍とは異腹であった。

一代の唱導師——大説教師である。

とにかく澄憲がしゃべり出すと聴衆は我れを忘れ、時を失つて聞き惚れた、と言われるなどだ。富楼那尊者の再来、とまで九条兼実が日記「玉葉」で賞揚している。

富楼那尊者は积尊十大弟子の一人と伝えられ、賓頭盧尊者ともども积尊が説いた八万四千の法巻を大衆に理解し易く噛みくだいて唱導した。

日本に仏教が伝来して久しいが、説教師として名をあげたのはこの澄憲が最初であらう。

澄憲は不思議な僧歴をたどった人で、比叡山や三井寺にいて天台僧の持戒を長年保っていたが、晩年に及んで突如として京の巷へ降りてきた。一条北小路に庵を結び妻を迎えた。妾もたくわえたと思うが何と一女十人の子を作ったのである。庵を安居院と名づけ、俗貴族そのままの生活を送った。芸能人なみにしゃべり歩いて財貨を得、妻妾を愛した。そして昨建仁三年八月六日、七十八歳でこの世を去った。

安居院は澄憲の第三子、聖覚が継いでいる。兄の真雲、海慧など僧籍がいたのに聖覚に名跡を継がせたのは、彼が父に劣らぬ能弁の士であったからである。以来、安居院は説法の「家元」「みたいな寺」となった。

この八月六日、安居院では先代澄憲の一周忌が営まれた。だが明遍は列席しなかった。以前にも彼は父信西入道の「兄弟八講」を敬遠している。兄弟集って徒党を組むことを嫌うだけで別に澄憲の死にふくむところがあるわけではない。

澄憲の位碑をかざる本尊仏前で誦經を終えた明遍は背後にひかえる甥の聖覚をふりかえった。一周忌法要の欠席を詫びた。聖覚もすでに三十六歳である。後顧の憂れ

いはなかった。落ち着いた口調で一周忌の模様などを告げた。

「叔父さま方は三井寺からだけでした」

と三人の名をあげる。三井寺の憲俊、寛兼、憲慶である。

信西入道のおびただしい遺児たちは殆んどが僧門へはいった。しかし今生存しているのは明遍を頭にこの三人しかいないのである。すぐ下の同腹弟、奈良の僧正勝賢も先年遷化してしまった。

「もうおぬしらの時代だ。それにしてもおぬしの評判は、なかなかのもの。父まさりと言うではないか」

「いやいや、とても」

「ただ……」

言いかけて声を呑んだ。

「ただ、何でしようか」

聖覚の眼が光る。

「おぬしの説法は専修の徒と同じだ、という声もある」

明遍が安居院へ来たのは兄の追善回向だけが目的ではなかったのだ。聖覚の説法にまつわる世間の噂、と言っても限られた貴族サークルでの噂だが、それに忠告を与

＜七箇条制誠への署名——嵯峨二尊院にて＞



えたい意図もあった。

「専修の徒とは、はつきり別流だと信じております」
聖覚は言い切った。

「しかし、おぬしは法然ご房のもとへしばしば出入りしておるそうだが」

「法然さまは専修とは違います」

「専修念仏であらうが」

「お考えはそれとおります。しかし、つねに専修の徒の先走った行動をいましておられます」

「七箇条の制誠か」

すでに明遍は、正信房湛空からその文案らしきものを聞き知っていた。制誠後の門弟たちの動きを掌握したいのも安居院来訪の目的にはいっている。

「嵯峨の二尊院で、あの制誠を守る、という誓いの署名も致しました」

「そなたもか」

「いいえ」

「なぜ、ゆかなんだのか」

「参ったのでございます」

聖覚は署名の日の様子をくわしく語った。

十一月七日の昼下がりにあたりから、嵯峨の二尊院へは続々と黒衣の念仏ひじりたちが集ってきた。二尊院の本坊は未だ完成していなかった。仮晋請の堂構内には机が持ち出され周囲に主だった法然の高足たちが立ちほだかっていた。

その高足たちとは、一念義幸西であり安楽房遵西、大和入道の見仏、住蓮、欣西らあった、と聖覚は証言する。

彼らの監視下、一人づつ署名してゆくのである。

その交名状は法然自身が前書きをし、吉水の内弟子たちがすでに署名を終えた巻き紙であった。

聖覚が署名をするために机の前へ歩み寄ると、左右からさえぎられたという。

「あなたは書く必要がない」

「なぜ？」

その念仏ひじりの顔を見た。たしか大和入道であった。

「あなたは専修とは違う」

人垣の外で誰かが叫んだ。

専修——専修念仏者の意味だが、どうやらこの元久年次あたりから、一箇の固有名詞に変化してきたようであ

る。当時の貴族らの日記でも、ただ「専修」と記している。過激な念仏者という意味だろう。

「正信房はどうであったかな」

明遍は甥に訊いた。

制誡の根まわし役である。署名の場所に二尊院を提供したのも正信房湛空だった。そこらの事情を、かねて明遍は湛空自身の口から聞き出しているのだ。

「私が出かけた日、彼の姿は見えませんでした」

「多分、八日も九日も、であろうな。長楽寺の律師は？」

聖覚は首を振った。明遍はひとりうなずいている。

「知ってるんですか」

「いや、湛空の話を聞いたとき、そんな予感がしたんだ。この男、駆けずりまわったあぐく、自分は除外されるとな。あるいは気配を察して、みずから身を引くか。どちらかだろうとな」

「自分から来なかったんでしょね」

「多分な。隆寛律師もだ」

「結果として、法然のご房は……」

「専修の徒に利用されたことになる。奴らはこんどの制誡を逆用しているのだ。門下のなかで曖昧な奴は除外し

てしまう。純粹な連中だけで結束する」

「私なぞは、その不純な念仏者ですか」

聖覚は笑った。

天台念仏と二股膏藥の学僧たちを排除して、純粹な専修念仏の徒たちだけを糾合し、いよいよ内部での結束力を強める。

過激派の指導分子は、七箇条の制誡をそのように利用した、と明遍は分析したのである。

「その首謀者は誰でしょうか。安樂房ですか。それとも大和入道？」

「いや、あんな輕卒で頭の悪い連中ではない」

「では誰でしょうか」

「幸西だろう」

ずばり言い切ってはみたものの、明遍にも確信はなかった。

ふと、ある人物をこれから訪ねてみようと思ひ立つた。そこで話し合ったら判るかも知れない。

「ところで僧都は、だいぶ専修の連中におくわしいようですね。興味がおありなのですか」

聖覚は訊きかえしてきた。

「興味？ 専修の連中にか」

「だいぶ情報に通じておられるようだ。私なぞ法然ご房に何度か会っているくせに、皆目判りませぬ」

「わしが興味をいだくのは法然ご房その人だよ。何であんな連中を接近させるかだ」

「ということは僧都も……」

「そうだ。ご房の真意を測り知れたら、わしはすべてを投げうって法然ご房のもとへ弟子入りをする」

これまで誰にも明かしたことがない明遍の本音であった。

七箇条の制誡と、それにかかわる門弟たちの署名。明遍の分析が正しかったかどうか。歴史はやがて正確な解答を提出してくるであろう。

「四十八巻伝」はこんなエピソードを紹介している。

氣鋭の専修念仏者である大和入道が訊いた。

「お上人が亡くなられたあと、往生の問題で疑問が生じたとき、誰に問法したらよろしいのでしょうか」

法然は即座に答えた。

「聖覚法印こそわが心を知る」

大和入道がこれにどう反応したかは触れていない。交

＜三十三間堂＞



名簿からの除外とからんで、この挿話は微妙である。

要するに制誠を遵守する、と誓った法然門下たちの交名状、それは比叡山への「降伏」を意味してはいなかった。逆に内部結束を固くして、不純分子を除去し、いよいよラジカルに前進する意図を明確にしたようである。

三

甥の聖寛との対談中、ふと明遍が会いたくなった人物は、蓮華王院にいた。潜伏していたと言いつ直した方がいい。

法本房行空である。

比叡山の衆徒にねらわれて、四条河原の乞食小屋は危険なので、ここ蓮華王院へ移り住んでいたのである。

蓮華王院は、長寛二年（一一六四）十二月、後白河法皇の発願に成った観音堂である。寄功者は平清盛である。千手千眼の観音像を一千一休安置した。通称を三十三間堂と呼ばれる。

ただし創建時のものは文暦二年（一二三五）の大地震で崩れ、さらに十四年後の建長元年に焼亡している。文永三年（一一六六）に復元したが、往時をそのまま模したと

いうことだから、現在の三十三間堂から偲べば当時の情景が活写できる。

法本房行空は、そのの堂僧にもぐりこみ、衆徒たちの追究をかわしていた。

この元久元年三月、此処で念仏者たちによる後白河法皇十三回忌法要を営んだことが、潜入のきっかけとなったようである。

この十三回忌法要は、安楽房遵西や大和入道見仏ら法皇旧側近の念仏者たちが企画施行したデモンストレーションでもあった。追善の素志は無論あったが、それ以上に六時礼讃の布久宣伝も兼ねた、とみなければなるまい。

導師に法然を仰ぎ、美音の念仏僧数十名が居流れて千百一体の観音群像を縫い歩きつつ声高らかに六時礼讃を謡たいあげたのである。

その音響と言い、背景の観音群像と言い、列する者すべてを生きながら浄土莊嚴へ誘うたに違いない。列する者のなかに、安楽房が日ごろ教導していた仁和寺御所の女房たちが混じっていたことは言うまでもあるまい。

この十三回忌法要は、蓮華王院の堂僧たちを一人洩れなく念仏僧に化してしまった。ために法本房行空は易々と潜入できたのである。

四条河原の乞食小屋のころと打って変わり、行空は蓬髪を丸め、髭を剃り落し、端正な堂僧になりすましていた。意外な美形だ、と明遍は思った。

「先日のこと、浄土寺二位どのが参詣にみえられた」
行空は高階栄子のことをいきなり話題にして、複雑に微笑んだ。

比叡山衆徒の襲撃が彼女の教唆であつたらう、とあの日明遍から推理されたわけだが、その栄子のお膝もとへ潜伏したことが痛快だったのであろう。

「気づかなんだか」

「全然……二位どのは、わしの顔をしみじみと眺め、昔愛したご坊と酷似していらっしやる、などと言った。幾歳になっても艶っぽいお方じゃ」

「安井門跡のことを言うておるのじゃろう」

高階栄子は、法皇在世中に皇子である門跡と密通しているという噂があった。

「いいや、違うようだ。わしがそのご坊とは、とたずね

たら高野のご坊……僧都、あなたのことらしいな」

「わしが浄土寺二位と……」

明遍はどきりとした。行空の笑いには辛辣な意味がふくまれている。

早く話題を転じたかった。

「ところでこの間、二尊院へいったそうだな」

「署名か。出かけたわけではない」

「いかなんだのか。ある者の話では、おぬしの署名もあったそう」

「あっただろう。成覚房がああ朝此処へ立ち寄って、代りに書いておくと言っておった。何しろ叡山からの間者もまぎれこんでいるゆえ、お前自身が現れてはまずい、とも申していた」

「何だ、代筆だったのか」

代筆ならば、京に不在の者でも名をつらねることが出来る。鎮西に去った聖光房弁長を欠落させた理由は何か。明遍は甥聖覚の前で考えついたおのれの分析がほぼ適中していたように思われた。

「成覚房幸西は何を画策しているのかな」

さりげない調子で訊いてみる。

「幸西がか。天下を乗っ取ることじゃ」

行空は腹芸なぞ出来る男ではなかった。

「天下を……」

「そうだ。この国の貴賤を問わず念仏者に教化してな。

政権を奪い取る構想だ」

「恐ろしいことを企てているのだな。専修の連中は。見通しはあるのか」

「ないでか。鎌倉北条家は殆んどが熱烈な念仏者だ。二品の尼公も、太郎どのもな。また京では九条兼実公が廟堂へ復活なされた」

「嗣子の良経公が大臣になられたな」

「北条家と九条どのが手を結べば、天下は易々と我らのものだ。手を結ばせるのが、我らの仕事よ」

孤高な念仏ひじりとばかり思いこんでいた。法本房行空はとてつもない野望を胸に藏していたのである。

未だこの仲間に加わる時機ではない。

明遍は即座に判断した。長年にわたつて宮廷政治の外縁を歩いてきた経験が教えてくれる。天下の政治とは、そんな甘いものではないからである。複雑に屈折しつつ流動してゆくものだ。

「ところで今日来た用事を未だ言わんではないか」

引揚げようとする明遍を鋭く呼び止めた。

「格別に用向きはない」

「探ぐりに来たのか」

「探ぐる、とは何を？」

「わしらの動きをじや」

「そんなもの探ぐったとて何の足しにもならぬ」

「そうではあるまい。僧都の周囲には政界、坊主社会の大物がうようよいる。みんな情報が欲しいのじゃろうが。専修念仏者たちの動きがな」

「あまり自分らの存在を過大視しないがよい」

「わしらが天下を取ったら、先ずしておくことを教えてやろう」

「何だ、それは」

「まづ先にやるのが坊主社会じや。不徹底な連中に肅清するぞ」

「不徹底な連中とは？」

「古い法衣をぬくぬくと着込みながら、口では新しい念仏思想なぞをしやべりまくっている連中だ」

「つまり、わしみたいな立場の道心者か。どんな方法で

肅清するのか」

「そうじやな」

行空は、立ち話をしている蓮華王院の大殿内をゆつくりと見まわした。千百一体の観音像が林立していた。

「さしづめこの観音像の首に、径しげな坊主どもの首をちょん斬って、一つづつぶら下げてやるか。千人は殺せるな」

この男が天下を奪ったら、やり兼ねないぞ、明遍はおぞ毛を逆立てた。

明遍は光堂へ帰る道すがら、あれこれと思いを散らした。

法本房行空は夢想家である。その革命論なぞ一顧だにする価値がない。放埒に女体を抱きしめながら口走る淫らな言葉の切れ端のようなものだ。三十三間堂の観音像に千人の僧の生ま首をぶら下げる発想も、女体を千人抱く妄想と変わるところはない。

だが、専修念仏者を糾合し、政治の軌道をひたむきに暴走しはじめたら、その推進者に冷酷で智慧深い者がいたとしたら、それは恐ろしい現実となるであろう。

成覚房幸西。

明遍はほんの二度しか面接したことがないこの僧の記憶をたぐり寄せてみる。

たしかにあの男には、その冷酷さと智恵があるはずだった。問題は幸西自身に行空のような野望があるのかどうかにかかってくる。

七箇条の制誠に続いて、法然の念仏教団は「興福寺奏状」という告発を受けた。

奏状は専修念仏の非を鳴らしたあと、はっきりと三人の策謀者の名をあげた。彼らの逮捕、処分を公儀へ訴えている。

安樂房遵西と法本房行空。それと、成覚房幸西であった。

誰がこの三人を指名させたのであろうか。よほど専修念仏者の内部事情に精通した者と推量せざるを得ない。

「興福寺奏状」の起草者は笠置の解脱房だったと伝えられている。その背後で、明遍僧都の影が揺曳してはいなかったであらうか。

それはともかくとして、この処分は法本房行空ひとりだけにとどまった。法然の側から「殊に不当」として追放、破門したのだった。

革命において、まっ先に脱落してゆくのは夢想家である。

法本房行空は、破門されたあと全国を放浪したらしい。一宿の上人と呼ばれたひじりは彼のことであるうか。一夜の宿を求め、渾身の教化をし、翌朝出立すると二度と同じ土地に姿を見せなかったと言われる遊行の念仏者であった。

終焉の地は佐渡だった、と伝えられている。

(つつく)

新会員のご紹介を広くお願い申し上げます。お知り合いの人やお檀家の皆様に呼びかけて、一人でも多くの読者をご勧誘下されますれば、幸いです。この四月よりは新たに年会費を二、五〇〇円に値上げさせていただきますことになりましたが、なにとぞ暖かいご配慮をお願い申し上げます。どうぞくれぐれも宜しく願います。

法然上人讃仰会

二 編集後記 二

○白砂を敷きつめた海岸線に寄せる大波小波。朝(あした)に夕(ゆうべ)に、さまよい歩いた松原の浜辺がなつかしい。また、切りたつた断崖に打ち碎ける荒波高波。岩頭の絶景に立ちすくんで、海の果て、空の果てを遠望してはるかに宇宙を感じたこともある。——さて、人の世の波風は……、それは人さまざま、思い思い。寒風に世間の荒波が絶えがたい時もあれば、あるいは、人の心の暖かいさざ波にむせび泣く時もある。まさに心打つ波とは、人それぞれの身と心のもちようで決まる。ところで「心うつ波」とは、確か、藤山寛美主宰するところの松竹新喜劇の演題の一つであった。——私は願う。こうした人情喜劇の世界が、かもし出す小さな波が、私たちの実際の世界に増幅されて、大きな心打つ波として、その波紋が広がることを。しかし心打つ波とは、すでに私の気づかないところで、多く

の善意と愛情の中でおのづから育くまれて
いることでもあらうか。

○江戸時代には、大江戸八百八町の街中も、現在と比べればごく限られた小さな範囲で、川(隅田川)向うもちょっと出はずれば、もうのどかな田園風景であつたという。そんな江戸の郊外には、大名の下屋敷や大身旗本の別邸があり、多くは梅林をもつていたのである。二月ともなれで、紅梅白梅の梅の花の香りが満ち満ちて、それはまた随分と風情のあつたことであらう。早春とはいえ、まだまだ寒さの残るこの時節、「梅にうぐいす」の絵のような景趣がしのばれる。

早春や誰にか明日の新しき 空華
春あさし人のえにしの絶ちがたく

白虹
○さて誠に恐縮するお願いであるが、四月より弊会年会費を現行の二千元から二千五百円に値上げさせていただきます。どうかくれぐれも宜しくご配慮願いたい。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十五巻 二月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十四年一月二十五日 印刷
昭和五十四年二月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

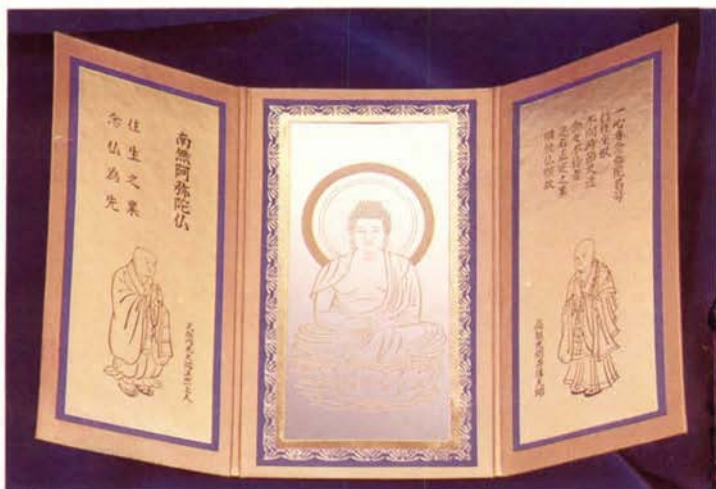
東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鐵仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

念 持 仏 =新発売=



○お在家の方々の中には、ご仏壇をお持ちでも、阿弥陀如来をおまつりしていない方、お位牌だけおまつりしている方が意外に多いのではないのでしょうか。この様な方々のために、仏壇用として念持仏を謹製いたしました。中央に阿弥陀如来、左右に高祖善導大師、宗祖法然上人の尊像をおまつりした携帯にもお手頃な仏様です。この念持仏は、中央が割れない特殊な鏡になっているのが特徴です。日々夜々、心の汚れを鏡の面に写して反省しながら、浄土の信仰を深めて下さい。どうか多くの人々の魂棚におまつりしていただくことを切望します。

定価 一体 2,500 円 (五十体以上は一割引)

送料 一体 200 円 (五十体以上は無料)

●寸法 21.8cm × 14cm 3枚折・実用新案登録済=番号53-044860番

(発売元) 〒153
東京都目黒区目黒 4-16-12

株式会社 泰 童
TEL (03) 711-6006

(取扱い) 〒102
東京都千代田区飯田橋 1-11-6

法然上人讃仰会
振替(東京)8-82187番